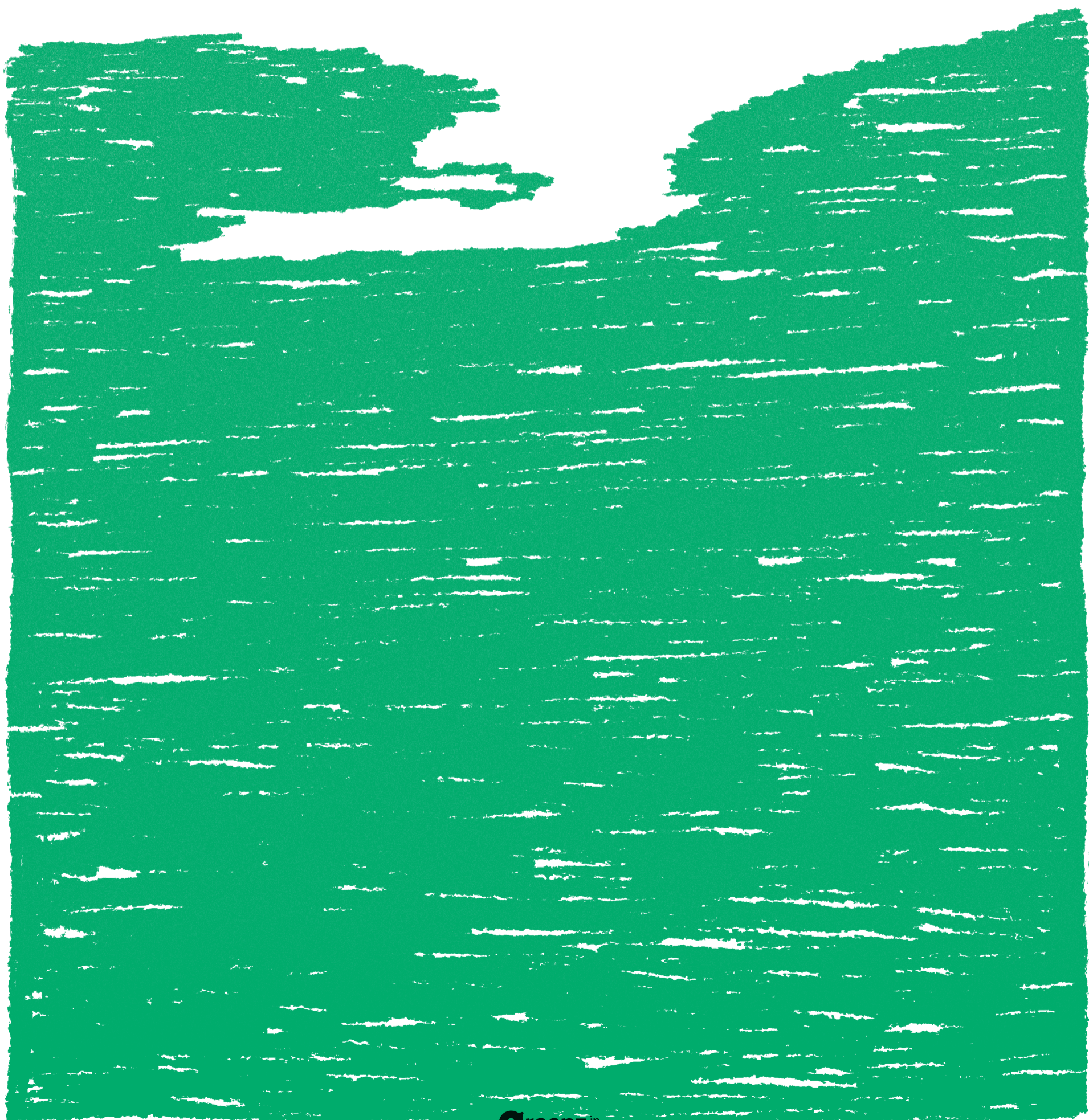




特集

能登半島のいま



INTERVIEW 森山 奈美さん/山本 亮さん/足袋拔 豪さん/新谷 健太さん/小浦 明生さん/高橋 博之さん

MESSAGE 関根 健次さん/東野 唯史さん/高橋 大就さん/石山 アンジュさん/嶋田 俊平さん/藤本 智士さん/秋吉 浩気さん/信岡 良亮さん/徳谷 柿次郎さん/大原 学さん/紀陸 武史さん/蒲沼 明/植原 正太郎

いまでも、この先も、能登は、
あきらめない。

だから、私たちも、能登を、
あきらめない。

みなさんに、考えてみてほしいことがあります。

いま、75歳だとします。
大きな地震が起きて、家が半壊してしまいました。

家を建て直すには約600万円かかります。
そのうち200万円ほどは支援金でまかなうことができそうです。

年金生活で、残りの約400万円の支出は厳しいため、
解体することも考え始めました。

ところが、業者に見積もりを依頼したところ、
解体には400万円ほどかかると言われました。

さて、家を建て直しますか？解体しますか？
そしてその後、どう生きていきますか？

おそらくこれが、能登のいまです。

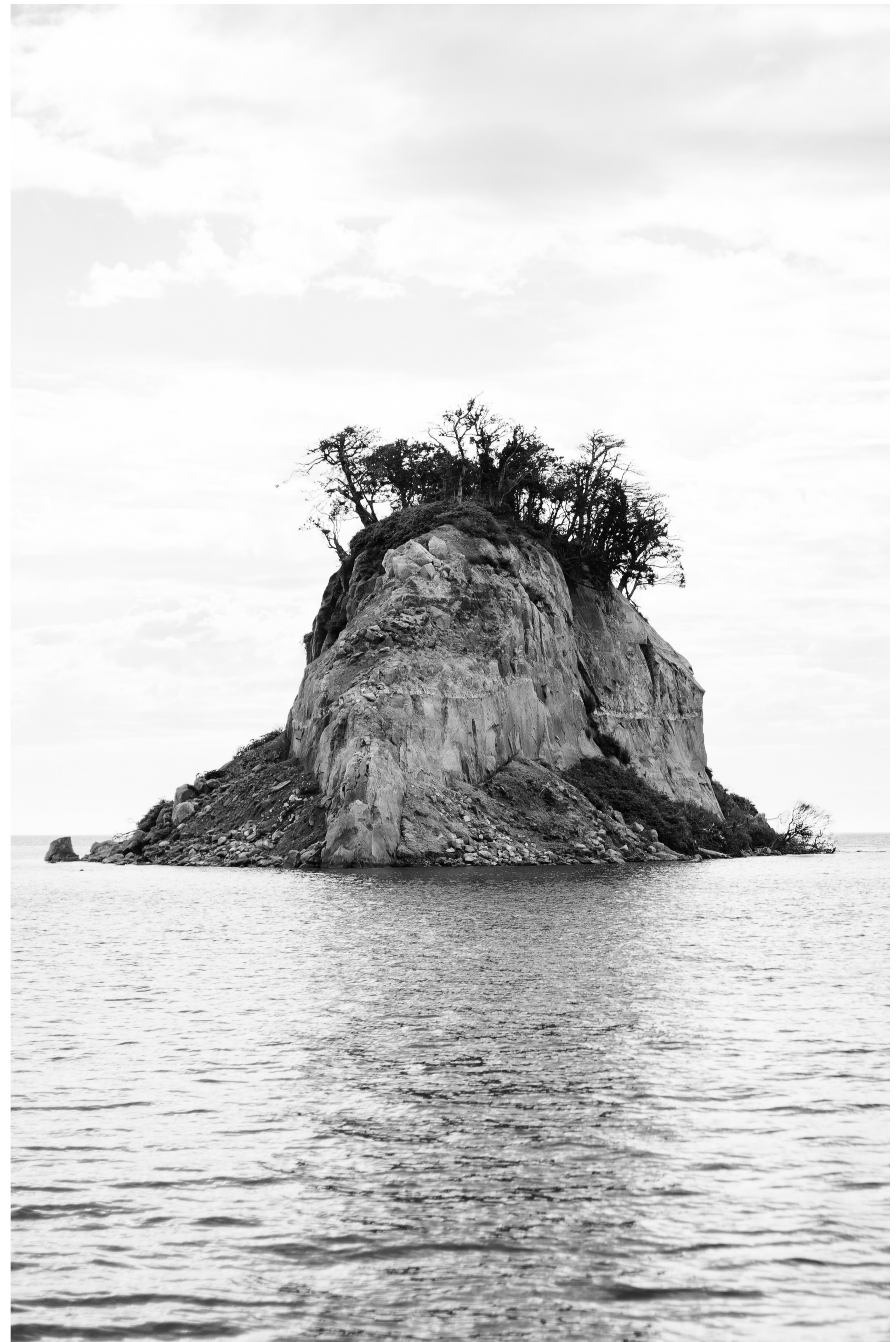
まちは、倒壊した家屋がそのままです。
上下水道の復旧率も、まだまだ低いです。

「なぜ復興が進まないのか」という声をよく聞きます。
でもそれは、ちょっとだけ違うのかもしれないと思いました。

外からは、進んでいるように見えないだけで、
悩み、苦しみながらも、
前を向いて、ゆっくりだけど歩みは止めていない。

そんな能登のいまが、能登でがんばる人の願いが、
みなさんのもとへ、届け！

greenz.jp 編集長
増村 江利子



外からは見えにくいけれど、復興は、一步一步、進んでいる

石川県の北部、能登半島のほぼ中央に位置する七尾市で、民間のまちづくり会社として、地域外の若者たちを能登の地域課題とつなぐコーディネートを長年行ってきた森山奈美さん。17年前の能登半島地震をきっかけに、事業領域を中間支援組織にうつした森山さんに、能登半島のいまを聞きました。



聞き手:増村 江利子 / 写真:蒲沼 明

—

森山奈美（もりやま・なみ）

株式会社御祓川 代表取締役

石川県七尾市生まれ。横浜国立大学工学部卒業。都市計画専攻。1995年計画情報研究所入社。都市計画コンサルタントとして地域振興計画、道路計画等を担当。株式会社御祓川の設立にかかわり、1999年同社チーフマネージャーを兼務。2007年より現職。川を中心としたまちづくりに取り組み、その取り組みが日本水大賞国土交通大臣賞、第7回「川の日」ワークショップグランプリなどを受賞。2009年に経済産業省「ソーシャルビジネス55選」に選出。2019年ふるさとづくり大賞個人表彰(総務大臣表彰)。いしかわ地域づくり協会専任コーディネーター、金沢大学非常勤講師なども務める。

—

—

「株式会社御祓川」の代表と、「一般社団法人能登復興ネットワーク」事務局長、そして「七尾未来基金設立準備会」事務局長の立場を行ったり来たりしています。「株式会社御祓川」についてお話しすると、1999年に設立した民間のまちづくり会社です。社名の通り、川沿いに店舗をつくってまちづくりをする会社だったのですが、2007年に能登半島地震があり、その地震をきっかけに、中間支援組織に事業領域を変えていったという経緯があります。

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—



—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—



七尾の中心市街地を東西に分ける「御碓川」。地震による地盤沈下で水位が上昇しているように見える

そうですね。準半壊でいいや、と言えるだけの財力のある人か、よっぽど早く進めたいか。店舗兼住宅など、商売が絡んでいると、直さないで商売ができない、となりますからね。でも、高齢者が多いですからね。大規模半壊と判定されたとして、修繕するのに、例えば600万円ほどかかるという見積もりが出たとして、補助金や支援金などで200万円ほどはまかなえる。とはいえ、残りの400万はどうするのっていう時に、借金をするかというと、二の足を踏みますよね。自分は75歳だと思ってください。年金暮らしのお年寄り、一人暮らしです(※一人暮らしだとさらに支援金は低くなります)。

——借金には手が出ませんね。子どもたちが巣立って、外にいるなら、お世話にはなりたくない。

子どもにお世話になったとしても、解体の見積もりをとったら400万です、という話になる。

——厳しいですね。簡単には選べないし、そのどちらでもない選択も視野に入りそうです。

そう。だから、意思決定するまでに、すごく時間がかかるんですよ。なので、なぜ倒壊したままなのかと言われたら、いや、決めていないからです、って感じです。見積もりも、そう簡単には出てこないですね。見積もりを出してもらうにも、解体の見積もりなのか、修繕するのか、壊して新築するのかなど、方針を決めないで見積もりを出す側も出せないですし、見積もりを依頼してから実際に見積もりが出るのも時間がかかるし、全てに時間がかかる。そして、材料が揃わないと意思決定ができないし、材料が揃ったとしても迷うし、意思決定をするためのパラメーターがめちゃくちゃ多いんです。それを高齢者にしてくださいというのは、かなり酷ですね。経営者でも迷う。

——進んでいないわけではないのですね。何が難しいのが見えてきました。

一つひとつが、難しいんです。本人の意向を全く無視して、家屋を全て壊してしまうことはできませんから、その難しいことを、1個ずつ解いていくしか方法はありません。

——東北は、線を引くことができたんですね。ここからここまでは全壊です、って。

そうなんです。だから、すぐに工事ができた。能登で、震災後にこうして倒壊した家屋が残っているとしても、別

に誰かがサポートしているわけではないと思います。ただ、何をやるにしても人が少ない。

——まだまだ、継続的にボランティアに来ていただくことも必要ですね。

はい。現地に来ることが難しくても、例えば能登の商品を買い支えをしてもらえるありがたいです。震災後も、七尾市では1月11日にヤマト運輸が再開すると聞いて、奥能登の事業者さんに、なんとか七尾市まで持ってきてくれば、「能登スタイルストア」で販売しますよ、とお伝えして、普段はコワーキングスペースの空間を全て倉庫にして、ここで在庫管理ができるようにしたんです。震災後も、食べていけなくちゃいけないですからね。1月だけで、1年分くらい動きましたね。まずはすでに仕入れていた在庫を出して、売上を立てましょうと。その先は、生産体制をあらたに整える必要があるので、長い目で見つつ、これから事業者さんと商品開発もやっていくフェーズにあります。そして、あとはやっぱり、人ですね。ボランティアとして来ていただくのはもちろん、「関わりしろ」をできるだけつくっていきたくと思っています。次から次へ、どんどんやりたいことがあるんですが、人がいないとスピードが落ちてしまうので、能登の未来をつくっていくプロジェクトを1つでも多く立ち上げて、そこに若い人たちに関わってもらえたらいいなと思います。

古くから続けられてきた「祭り」は、防災活動でもある

——震災から9ヶ月を経て、いま感じていることを教えてください。

そうですね。日本各地でさまざまな災害や水害が続いていることで、本来的な社会のあり方に近づいている感覚があります。被災して大変、かわいそうだから助けに行くという構図では、多分乗り越えられないんですよ。奥能登がもともと持っている助け合いの文化、互助精神のほうで、明治維新以降につけてきた近代社会よりも、より長い歴史を持っているんです。そして能登には、それが色濃く残っている。昭和の時代には「遅れている」というふうに見られていたのが、実は、そっこのほうが本来的だったとっていて。私は、そうした「遅れている」と捉えられてきたものを信じているんです。

——素敵ですね。

それが現れるのが、祭りなんです。都会で暮らしている方からすると、なんでこの期に及んで祭りをやっているの?と思うかもしれませんが、祭りの多機能性って素晴らしいんです。これさえやっておけば大丈夫だよ、というのを先人たちが残してくれた。本当にすごいですよね。最も非効率的なことをやるんですよ。みんなで集まって身体的にもつらいことをして、車で行けば5分のところを2時間かけて歩きたいなことを、平気でみんなでやるわけじゃないですか。よくよく考えると不合理で、非効率の塊みたいなことをやり続けることが、結局、合理的な結果を生む。祭りを続けてきたから、震災時にも、みんなが大量の料理をつくることができたり、ロープワークができたり、お互いを信じて、声を掛け合って、前を向くことができるんですよ。

——生きていくためのリテラシーと、みんなでそれやっていくという精神。


防災活動だなんて思いました。里山、里海を守る、そういった環境面も、すべてそこに紐づいていると思うんです。農作業もそうですね。持続可能なしくみなんやろうなあって思います。

——祭りとは、防災活動でもあり、みんなで生きていくための知恵である、と。「七尾未来基金」の設立準備が始まっていると思いますが、この基金についても教えてください。

能登の里山、里海を未来につなげていくために、人とお金のエコシステムをちゃんとつくりたいです。いまは人が一番のネックなので、人材を能登へ連れてくることできる、あるいは予算を引っ張って行くことができる、というしくみづくりを誰かがやらなきゃいけないと思っていて。実行する人は、そこに一生懸命になっちゃうので、それがどんな価値があるのかをしっかりと評価をして、対外的に発信したり、そういった中間支援的な部分ができたらいいなと思ってコミュニティ財団をつくらうと話していたら、震災がきてしまったんですよ。財団は準備中ですが、本当にやらなきゃダメだ、という覚悟をもって取り組んでいます。



株式会社御碓川
石川県七尾市生駒町3-3
misogigawa.com





「マイナス」を「ゼロ」にもできない それでも里山の暮らしを取り戻したい

能登の中山間地にある輪島市^{むらぎ}三井で、集落全体をホテルに見立てた「里山まるごとホテル」を手掛けている山本亮さん。大学でランドスケープデザインを専攻し、ゼミの活動で訪れた地に、2014年、地域おこし協力隊として移住しました。10年を経て、現在は能登の震災復興に携わる山本さんに、里山で暮らすことの意義を聞きました。

聞き手:増村 江利子 / 写真:蒲沼 明

—

山本亮（やまもと・りょう）

一般社団法人のと復耕ラボ 代表理事

東京都出身。東京農業大学のゼミ合宿で輪島市三井町を訪れる。このときの美しい農村風景や、里山とともにある暮らしの豊かさに惚れこみ、この暮らしを自分自身が受け継ぎたいと思うように。2014年に三井町へ移住し、地域おこし協力隊として「能登輪島米物語」をプロデュース、「みい里山百笑の会」の立ち上げに携わる。協力隊終了後は、自身が惚れた里山の暮らしを、訪れた人により楽しんでもらいたい、住んでいる人がより楽しく笑顔で暮らせるようにしていきたいと、茅葺庵を中心とした里山まるごとホテルを構想。地域の人たちと一緒に夢を現実に。

—

自分自身が 里山の暮らしを楽しむこと

— 山本さんは、もともと輪島市にご縁があるのですね。

大学でランドスケープデザインを学んだのですが、そのゼミで訪れたのがこの輪島だったんです。夜行バスで金沢まで来て、そこからバスを乗り継いで、12時間くらいかけて来たんですが、里山の風景や、そこに吹いている風がとても心地よくて。そこから、美しい農村の風景をどうやったら守れるかを考えるようになりました。もともと、両親がアウトドア好きで、自然や田舎が好きだったり、高校時代に学校でピオトープをつくる経験を経て、人と自然が共生できる場をつくることにおもしろさを感じていて。里山に暮らすことは、都市部とはまったく異なる豊かさがあると思うんです。地域のじいちゃんたちが、学生たちに野菜をもってきてくれたんですけど、本当にいい笑顔で。貨幣とは違う軸で、大事なものがある。お金がなくても里山があるから食べるものには困らないし、だから人に優しくできるって言うじいちゃんもいて、カッコいいなと思ったんです。

— 素敵なおじいちゃんですね。それで、いつか農村に移住したいと思ったのですね。

大学卒業後は、まずはまちづくりのコンサルティング会社に就職して、住民参加型のまちづくりなどのプロジェクトを担当しました。その後、輪島市の地域おこし協力隊に着任して、6次産業化を担ったり、お米のブランディングに従事しました。地域の人がやりたいと思ったことを実現する手助けをしていた、という感じですね。

— その後、起業して2018年から「里山まるごとホテル」を始めていますね。

そうですね。地域を一つのホテルに見立てて、里山の暮らしを楽しむというコンセプトで、震災で休止してい



ますが、現在進行形です。当初は、この地域の農家民宿とのコラボレーションというかたちで始めました。コロナ禍で思うようにいかない時期もありましたが、去年ぐらいからようやく目標に追いついてきました。

— アイデアも素晴らしいし、滞在した人の満足度が高そうですね。楽天トラベルでは、4.9という評価を取っていますね。

僕自身が里山の暮らしを楽しんで、それをシェアすることで、里山の暮らしを楽しむ仲間をつくるのが自分のミッションだと思っているんです。お客さんに喜んでもらうだけでなく、地域の人が関わってくれる、そういった関係づくりはできていると思います。

やってもやっても、 マイナスをゼロにもできない

— そこで、1月1日の震災を迎えたのですね。

東京の妻の実家に帰省していました。ニュースで、震源が能登で、しかもこの辺だとわかって。その後すぐに津波の警報が鳴って、これはいつもとは違うと感じました。そうはいつでも、山沿いの三井までひどい被害を受けているとは想像していなかったんです。夜になって区長さんから、「駐車場にみんな避難しているけど、寒いから薪を使っていいか」と連絡がありました。それではじめて、自分の地域にとんでもないことが起きたことを認識しました。この駐車場に、40人ぐらい避難していたようです。それからずっと、ぐっすりと眠ることができない心境でしたね。すぐに単身で戻る準備はしていたのですが、車を置いてきていて公共交通も止まっていたので、帰る方法を探し

んです。行政が渋滞を懸念していたので、渋滞にならないよう配慮して。初日は17時くらいに到着するように来てもらって、翌日、丸1日ボランティア作業してもらい、帰る人はそのまま夜に移動、できる人はもう1泊して、午前中に作業してから、午後イチで能登を出発する予定で募集をする。最初は、過酷でした。水道が止まっていたので、スタッフの家の井戸水を汲みに行って、水を確保することもしていました。

— 水を確保するだけでも、時間も人手も必要ですよね。

ほんと、半日がかりなんです。4月2日ようやく水道水が使えるようになって、だいぶ状況が変わりました。でも、その頃にはもう、ボランティアに人が来てくれなくなりました。当初は、「3ヶ月ぐらい頑張れば、ボランティアがどんどん来てくれて、そのボランティアの中で役割もできていって、どんどん手が離れていくから、そこまで頑張ろう」と言い合ってきたんですけど、一向にそうした兆しが見えない。ずっと自分たちが頑張るしかない状況でした。立ち上げから伴走してくださっていたメンバーは林業従事者で、本業の準備もあるから、3月半ばには地元にもどらなければいけないとなって、心の頼りもいなくなって。

— とてもしんどいんですね。

そうですね。正直やめることを考えた時期もあったのですが、「右腕派遣」として、コーディネーターをどんどん送り込んでもらったんですね。七尾市の森山奈美さんがつないでくれて。ゴールデンウィークには5人ぐらいいたかな。2週間から1か月ぐらい滞在してくれるメンバーが来てくれたおかげで、その時は、他にも2拠点を動かしていたんですが、3拠点合わせて50人のボランティアに来てもらうことを目標にすることができて。でも、迷いはずっとあるんです。瓦礫を片づける、ものを運び出すって、マイナスをゼロにしていく作業じゃないですか。高齢者の多い地域で市街地からも離れているので、なかなか支援の手が入らず、社会福祉協議会に入ったニーズも、僕らが受け持つ状態が続いているんですが、そうやって僕らがずっとやっていたら、未来はどうなっていくんだろうって。若い僕らがプラスになる動きをつかっていかない限りは、ただ衰退してしまうのではないかというおそれがあったりとか。

— やってもやっても、まだまだやることがあって、それでもゼロにしかならない。

— それで、ひとまず単身で戻ってきたのですね。戻ってきて、どんな様子でしたか？

それこそ、まだ来ないでくださいっていうメッセージが流れていましたけどね。家を確認したら、もうぐちゃぐちゃでした。倒壊しているわけではないし、一見無事なように見えただけど、中を見てすぐに、これはもう住めないと判断しました。「里山まるごとホテル」で使っているこの古民家を、現在はボランティア拠点にして、ボランティアに来てくれる人のサポートや運営をすることになりました。1月15日から3月くらいは、東京1週間、能登2週間という往復生活をして、「みなし仮設住宅」へ入居してからは、日、月、火曜は金沢で家族と暮らして、ここでは、支援いただいたトレーラーハウスに寝泊まりしています。

— そんなふうに、この拠点でできることを続けてきたのですね。

僕らは、2泊3日を目安にボランティアの募集をしていた

ていました。それで、7月くらいから、木、金、土しかボランティア活動をしないと決めて、火、水は、未来をつくる活動に充てようと。日、月はしっかり休みましよう切り替えました。人が滞在する拠点や場づくりは必要とされているし、この場があることによって、いろんな人が来てくれて、新しい未来がつかれるかもしれないという兆しを感じることもあって。ボランティアさんと、毎晩のように囲炉裏を囲んで話して。そうこうしているうちに、あっという間に時間が過ぎていきます。

— 未来に向けての活動では、どんなことをしているのですか？

一つは、森づくりをしていきたいと思っています。ほとんど人手が入っておらず、荒れてきてしまってるので、自分たちでもう一度、森と自分たちの暮らしの関係性をつないで、村づくりができたらというのがベースにあって。それで収益をつくれるかどうかは、やってみないとわからないのですが、森から薪を取ったり、森を企業研修や遊び場といったフィールドとして活用できたらいいなど。

— かつては、そういう暮らしをしてきたはずなんですよね。

そうですね。僕らは「退行的進化」と言っているんですが、ちょっと戻ったところから、別軸で進化させることができたらいいのかなと。かつての里山暮らしをベースに置きつつ、それをいまの時代に合わせて進化させていく。その結果、何が見えてくるかを実験したいと思っているんです。それに、手間暇をかけることや、苦勞をいとわないことが、この地域の文化を支えているんじゃないかとも思っていて。

— 例えば、どんな手間暇や苦勞ですか？

例えば、近所のばあちゃんと、子どもが赤飯が好きなんだと会話をしたことがあったんです。ある時「赤飯炊いたから取りにおいて」と言われて行ってみると、輪島漆器に赤飯が入っていて、蓋を開けると、子ども用のミニサイズのラップにくるまれて、綺麗に並んでいて。自分で育てた米、小豆、粟をつかって。すごく手間暇がかかるじゃないですか。そういうことが、豊かだなと思うんです。

— やってもやっても、まだまだやることがあって、それでもゼロにしかならないというか。もう、毎日モヤモヤし



他にも、3月になって「家の片付けもろくにできていないけど、ジャガイモを植えたくなっちゃった」と話している。そうした里山で暮らすリズムが、体に染み込んでいる。1月2日の朝には、家から持ってきたご飯で自分たちで炊き出して、おにぎりをつくって、どんどん配っていたそうです。平時からのつながりだったり、暮らしのDNAが、身体に刷り込まれているんですね。百姓気質をもつのは、主に70代以上の人たちですが、そうした里山暮らしという文化そのもの、精神性がどんどん失われていくことに、震災前から危機感を感じていました。だからこそ、自分たちが引き継いで、やっていきたいなと。

— 次の世代に残したい、大切なものですよね。

そういったことのなかに、豊かさがあるんじゃないのかなって。それまでかかっていた手間暇をお金で解決してきた結果、自分では何もつくり出すことができなくなっている。生活力というか、人間力というか、自給力というべきか。自分たちで何かを見出せる力を持っていれば、つくること自体を楽しめるんですね。災害があったとしても、自分たちで修復することができるという安心感があるから、慌てない。そもそも食料を自給できていることの強さが基盤にあるし。これって、とても豊かなことなんじゃないかと思うんです。

— 本当にそうですね。

田畑を耕して、山から薪という資源を取りながら、来年は、もう一つ茅葺きの古民家を、外の人と地元の人が入り混じる滞在拠点として、継続的に使えるようにリノベーションしたいと考えています。そういう場所を能登につくり続けていくことが、新しい未来をつつっていくことにつながるかなと。飲食店に能登の恵みを食べにきてもらって、それをSNSで投稿してくれるだけでも支援になります。もう本当に、料理をつくるだけでも、畑を耕すだけでも、草刈りをするだけでも、なんでもいいんです。これからの未来と一緒につくっていく仲間が欲しいし、そういう人に来てほしいと思っています。

一般社団法人のと復耕ラボ
石川県輪島市三井町小泉漆原14-2
古民家レストラン茅葺庵内
sites.google.com/view/noto-fukko-labo



生きることを、社会基盤に依存している社会から、どう脱するか

珠洲市が所有する約1万5千坪の遊休地を活用して、人と馬が共生する森の放牧場「珠洲ホースパーク」を運営する足袋拔豪さん。華やかなレースから身を引き、余生を穏やかに送る馬たちを地域で育て、観光資源をつくろうとする、みんなの馬株式会社代表の足袋拔豪さんに、馬とともに震災を生き抜いたお話を聞きました。

聞き手:増村 江利子 / 写真:蒲沼 明

—

足袋拔豪（たびぬき・ごう）

みんなの馬株式会社 代表取締役

Living Anywhere Commons能登珠洲拠点責任者。石川県珠洲市の内浦出身。ダイビングのインストラクター、カメラマン、農家と幅広い経験を持ち、現在はLAC能登珠洲拠点(木ノ浦ビレッジ)の運営を行う。地元への貢献をミッションとし、珠洲市でビジネスを立ち上げようとしている若者のパイプ役となるようなコミュニティづくりや、地域の問題を解決するための仕組みづくりに尽力している。

目標は、エサ代となる月給8万円を、馬自身が稼ぐこと

—足袋拔さんは、珠洲市生まれで、Uターンをされたのですね。

生まれは珠洲市で、高校から金沢市でした。だから、市内の地名もろくに知らないまま出てしまったのですが、13年ほど前にUターンしました。

当時は、スキューバダイビングのインストラクターでした。そのタイミングで、能登は世界農業遺産の認定を受けたんですね。認定を受けるのに、里山、里海の研究者が結構入ることになって。海女さんと一緒に潜って写真や映像撮影をする仕事が増えていきました。それで、農業遺産の認定の際に、農業が環境負荷を結構かけていることを知り、写真を撮りに珠洲に戻ったはずが、環境配慮型の農業を始めることにしたんです。農業生産法人は、今でも続けています。その後、奥能登すず体験宿泊施設「木ノ浦ビレッジ」を始めました。現在は、みんなの馬株式会社で、競馬や乗馬クラブを引退し、余生を過ごす馬を育てています。競走馬って、勝率



で命の長さが決められるんです。3歳の夏までに1勝できないと引退。大半は殺処分され、ペットフードなどになります。そうした悲しい運命から1頭でも救いたくてプロジェクトが生まれました。目標は、エサ代となる月給8万円を、馬自身が稼ぐこと。それは、引退後も幸せに生きるために必要な金額なんです。美しい自然の中で、のびのびと暮らしていけるように。

生きることを、社会基盤に依存している社会

—さまざまな事業を手掛けているのですね。震災のあった日も、馬と一緒にいたのですか？

はい、馬房にいました。本震で馬房のロックが外れて、馬が出てきたので、近くの角馬場に入れました。そうしたら今度は津波の警報が鳴って。ハザードマップでは、ここまで津波は来ないとされています。でも、みんななどんどん坂が上がっていく。

道は、もうガタガタに割れていたんですね。競走馬って繊細で、変化に対して敏感に反応するんですよ。外に逃がすことも考えたんですが、割れたアスファルトの上を歩けるか心配だったのでギリギリまで待つことにして、結局残ったんです。

その後は、ここから身動きが取れなくなっちゃって。道路自体が崩れたり、家屋が倒壊して交差点がふさがったり。地震が起きたのは16時過ぎで、すぐ暗くなって余震が心配だったので、そのまま馬に服を着せて外で待機しました。スタッフは5〜6人いたかな。この建物も、崩れるかもしれないので、1週間ぐらい、みんな車中泊をしました。

—その1週間は、長く感じられたかと思います。

そうですね。メンタルが不調になるスタッフも始始めて。通信が不安定だったので、外と連絡がなかなか取れなくなって。道路が復旧したタイミングで、ようやくスタッフたちは実家に戻って、残った3人のスタッフで、4月までなんとかやってきました。

上下水道や電気が復旧するのに、20日ぐらいかかりました。通信はギリギリ。民間支援が4日ぐらいから入りましたが、それまで食いつなぐのは、非常食が多少あった



ので、なんとかありました。でも、特に水は大変でした。馬のための水も必要ですから。近くにある、僕の実家の井戸水から、農業用のタンクに毎日汲んで、馬にあげていました。車で10分の距離なのに、片道1時間くらいかかるんですよ。電柱や家屋が倒壊していたりするので、迂回して迂回して、道が悪くてスピードも出せないんです。

—水の確保のために、毎日、2時間をかけて往復したのですね。

毎日でした。水は、114日ぶりに水道が出るようになりました。そうはいつでも、配管はもうダメになっているので、新たに水道を立ち上げてもらって、そこからホースを引っ張っている感じです。僕らの住まいもゴールデンウイーク前に水道が通るようになったので、ようやく帰宅しました。最初の2ヶ月は、ミニバンの荷台で寝ていました。3月には、インスタントハウスが支援で届けられて。

—いつまでこの生活を続けられるのか、不安はありませんでしたか？

馬を移すことは大変なんです。逆に、馬と一緒にいた方が、体も動かし、健康的なんですよ。この土地って、もともと水がないんです。七尾市までは白山からバイプラインで水が来ているけど、そこから先の奥能登はバイプラインがない。だから、ダムをつくったりしながら、昭和



—そうですね。この土地にある資源がどういったもので、どこからどんなふうに得ることができるのか。いまは、そうした生きていくために必要なリテラシーがなくても、蛇口をひねれば水が出てくることに慣れてしまっているように思います。

水道インフラも含めて、生きることを社会基盤に依存している社会なんですね。そのリスクヘッジ、バックアップをちゃんと考えないといけない。今回の僕らの学びは、そこにあります。

珠洲市内で、一番早く水が復旧したのは、簡易水道を使って生活しているエリアだったんです。山から自分たちで水をひいている。たまたまパイプが大丈夫だったというもありますが、自分たちで日頃から水の管理をしていたわけですから、復旧が早かった。

—本当に大事な話ですよ。メンテナンスの負荷はあるけれど、しくみや構造がシンプルで、自分たちで管理できるからこそ、レジリエンスが高い。どうしたら、そのレジリエンスの高さを次の世代へと継いでいけるのでしょうか。用水路の点検や清掃も、若い人がいないと難しくなっていますよね。

そうですね。改善すべき点は、コミュニティの若返りだと思うんです。コミュニティの意思決定者が若い人であるほうが、もう少し柔軟に対応できたと思う部分もあるんです。災害時って本質が出てしまう側面があって、避難所の中ではコミュニティの分断が表面化してきたりします。コミュニティをどう変えていけるかが、とても重要なポイントだと思います。もう一つは、水洗トイレではなくバイオトイレを使わなくてはいけない状況になったときに、バイオトイレが微生物を活性状態にしておく、その原理を理解してメンテナンスができるかということ。日頃からインプットして実践しておかないといけないのかなと。

—知識としてもっていることと、日頃から実践していることでは、全く異なりますね。

馬は、人を映し出す鏡

—この土地で、これからどのようなことを展開していきたいと考えていますか？

地震のあと、いろいろと考えているのは、住民がまだ仮

設住宅にも入れていない状況ではありますが、外から支援で入ってくれる人たちの滞り場所がないんですね。そのため、まずは宿泊ができるようなくみが必要だなと思っています。自律分散社会のしくみがちよっとでも体験できたりするといったこと。

もう一つは、教育と福祉です。馬と暮らすことは、教育の側面からもいいところがたくさんあります。ホースセラピーを企業の研修などで取り入れてもらうことも事業としてやってみようかなと考えています。

—人間だけでなく、馬も幸せに生きることができそうです。読者のみなさんに呼びかけたいことはありますか？

まずは、ここに来てもらうことですね。競走馬のセカンドドライブを知ってほしい。そして、企業にお勤めの方であれば、ホースコーチングというのですが、馬とのワークを通じてリーダーシップやマネジメント、チームビルディングを学ぶ研修に参加していただけたらと思います。馬って、ミラー・ニューロンという神経細胞を脳内に多くもっていて、その脳内細胞によって馬は目の前にいる人の感情を読み取り、自分自身も同じ感情になる傾向があるんです。つまり、馬は、人を映し出す鏡なんですね。普段の行動を瞬時に、反射で返してくれるんですよ。なので、普段どんなリーダーシップを発揮しているかは、馬と一緒に歩くと全部出てしまう。その気づきももらうことができるのが、馬とワークすることの利点です。それをみんなでフィードバックしあって、みんなで学ぶことができるんです。

—馬って素晴らしい動物なのですね。

そうですね。組織の縦軸でホースコーチングをやってもいいし、横軸でやってもいいし、全く異なる部署の人員でやってもいい。自分で自分自身のことに気づくと、人って、どんどん変容していくんです。そうしているうちに、誰かとの関係性が驚くほど変わったり、気づいたら新しいプロジェクトが生まれていたりする。支援という言葉が好きではないし、どんな支援をしてほしいかってすぐ考えてしまうけど、シンプルに、ここに来て馬と触れ合ってもらえたら嬉しいです。

珠洲ホースパーク

石川県珠洲市蛸島町鉢ヶ崎36-3
www.minnano-uma.com



自分の手の届く範囲で、銭湯だからできることを続けたい

自身も被災して避難所で生活するなか、津波被害をギリギリ免れた薪ボイラーで地下水を温め、営業を再開した銭湯「海浜あみだ湯」。市内で断水が続くなか、一部の倒壊した家屋の廃材を受け入れて、市民に無料で銭湯を提供し続けている新谷健太さんに、震災からこれまでの道のりを聞きました。

聞き手:増村 江利子 / 写真:蒲沼 明

—

新谷健太（しんや・けんた）

「海浜あみだ湯」運営責任者

北海道北見市出身。2015年金沢美術工芸大学油画専攻卒業後、アーティスト・ラン・スペース&コミュニティ「芸宿」を運営。フリーターをしながら制作活動を行い、2017年珠洲市に移住。地域おこし協力隊として勤務。2018年ゲストハウス「仮（）-karikakko-」開業。

怖いぐらい静かなまちを、ただ呆然と見下ろす

—震災後、4ヶ月が経過した頃に、この「海浜あみだ湯」へ来ました。新谷さんは、地域おこし協力隊として珠洲市に来たあと、ゲストハウスの運営をして、そのうちに、「海浜あみだ湯」を引き継ぐことになったんですね。今日もまちを回りましたが、崩壊した建物はそのままですね。さかのぼって、震災時もここにいたのですか？

珠洲市の別エリアの自宅にいました。昨年の5月の地震も、経験したことのないような大きな揺れだったんですが、今回の地震は、もう全然次元が違う感じでした。強さも、体感する長さも。その瞬間は、何が起きたか分からなくて、倒れてきたクローゼットをギリギリかわして、眼鏡を落としてしまって視界不良の中、周りを見渡したら、崩れた壁の隙間から光が入って、砂埃でキラキラしていて、映画のワンシーンのようでした。

揺れがあったタイミングはキッチンにいて、その場がかがんでいたんです。揺れが収まって立ち上がって「猫は大丈夫かな」とか、「買ってきたワインが割れちゃったな」などとのんきなことを考えていたんですが、窓から隣の家の崩れた屋根が見えた途端、これはまずい、とんでもない大きな地震が起きたんだと思って、急いで外に出ました。自宅も倒壊しかかっている感じで、東日本大震災の津波の映像が浮かんで、急いで避難所に逃げました。

—もうここには居られない、とすぐに判断されたのですね。いったん避難されて、避難所は、どんな様子でしたか？

そうですね。とりあえず逃げなきゃ、と思いました。海沿いのエリアだったので、この規模の地震だったら、津波が来てもおかしくないと思って。避難所は小学校なんですけど、昇降口が閉まっていたので、区長さんがガラスを蹴破って鍵を開けて、「みんな、上に登って」と言って。20人ほどその場にいましたが、みんなパニックを起こしていて、子どもたちは泣き叫んでいました。通信が途絶えていたので情報が入らなくて、津波が来ているのか来ていないのかもわからなくて。もう夕方まで暗くなっていて、まちの明かりが一切ない怖いぐらい静かなまちを、教室の窓からみんなただ呆然と見下ろすだけ、みたいな。



—明かりもなく、真っ暗になっていって、情報も入ってこない。何が起きているのかよくわからないって怖いんですよね。

そうですね。結局、津波は僕らが住んでいたエリアは大丈夫だったんですが、海沿いのエリアには到達していました。通信は、1時間ほどしてから使えるようになって、ニュースで放映されている津波の映像を見たのですが、そこがこのまちなか、珠洲市のどこなのかもわからなくて。準備していた防災バッグを持ち出す余裕もなく、お財布や携帯電話を持って家を飛び出した感じだったので、車中泊で暖を取りながら過ごしました。

—珠洲市は、真冬は寒いですよね。水道や電気といったインフラがない状態ですね。電気などは復旧が早かったのでしょうか。

普通に氷点下まで下がりますし、雪も降るので結構寒いです。おっちゃんたちは自宅から薪を持ってきて、小学校の校庭で焚き火をしていました。そして珠洲市の市街地に移住者仲間がいるんですが、高校の一室で教育支援活動をしていたこともあって、翌日には、そこにみんなで集合しました。どの道なら車で通れるのか、情報を調べたり、聞き込みをしながら移動しました。そこで3日間ほど、避難所生活をしました。市街地のあたりは、電気は1月3日くらいには、一部復旧していました。飲料水については、珠洲市はそれなりに備蓄をしていたんです。昨年にも地震がありましたし、それ以前からも群発地震があったりしたことが背景にあると思います。それぞれの避難所ごとに、水や最低限の物資がありました。これは僕の感覚ではありませんが、東日本大震災の経験や、熊本地震の経験からか、物資をヘリコプターで配給することについては、早急かつスムーズに行われていた印象があります。飲料水がない、という状況は市街地ではほとんどなかったです。



—そうした運営再開の他にも、二次避難のコーディネーターやボランティアの受け入れなどをされていたのですね。



水道というインフラが、絶望的であるという現実

—その後、「海浜あみだ湯」を再開されていますが、その決断に迷いはなかったのでしょうか。

僕は金沢美術工芸大学卒で、金沢に知り合いや、もともと運営していたスペースもあったので、片っ端から連絡して、一時的に仲間たちと共に金沢で滞在していました。その間にも関係者と連絡や打ち合わせをしまくって、1月9日に戻ってきました。「海浜あみだ湯」は、屋根の一部が落ちたぐらいで、建物自体は大丈夫そうだとことがわかりました。電源が復旧したタイミングで、一通り運転をしてみました。配管のどこかが破損していることはわかったのですが、幸い、弱いながらも地下水を汲み上げることはできていて、その時点では、もと通り運営するとは思っていなかったんですが、少なくとも地下水が確保できたので、避難所に仮設トイレが設置されたタイミングで、そのトイレの水と



しての活用が始まりました。

その後、1月19日から再開しました。僕が一時金沢に行っている間に、市内の水道が使えるようになるのはかなり絶望的で、もう1ヶ月や3ヶ月といった次元では戻らないという話を聞いたんです。それで、運営ができるのであれば、「海浜あみだ湯」を再開した方がいいかもなぁ、くらいノリだったんです。

—水という大事なインフラが絶望的であると知って、ショックはかなり大きかったのではないのでしょうか。

そうですね、かなり大きかったですね。やっぱり水がなかったら何もできない。一方で、お風呂が使えなくて困ってる人もいるし、もっと言えば亡くなっている人もいるなかで、いま自分ができることをやらなければと思って、営業再開まで駆け抜けた感じです。

—そうした運営再開の他にも、二次避難のコーディネーターやボランティアの受け入れなどをされていたのですね。

水道インフラが絶望的で、避難所生活が長く続くと災害関連死もありうることが予想されていたので、3月末ぐらいまでは、「海浜あみだ湯」の運営に尽力しながら、移住者の仲間や珠洲市の人たちと、二次避難のコーディネーターをしていました。というのも、かなり情報が錯綜していたんですね。ご高齢の方はスマートフォンが手元にあるわけでもないし、固定電話も使えないので、連絡が取れない。「海浜あみだ湯」に来てくれた時に、代わりにご家族に連絡をしていました。避難所運営をする知人に「こういう人がいるんだけど、こういう場合はどうしたらいいかな？」と相談を受けたりもしました。ずっと休みなして動いていたんですが、3月末に珠洲市内の水道復旧率が約3パーセントという報道が出て、これは思った以上に長期戦になるな、体力がもたないなと思って、一旦1週間ぐらい休業しました。

—休業中に、どんなことを考えていたのですか？

一度冷静になろうとする自分がいたように思います。自分の身の周りのこともしましたが、その機会に、「海浜あみだ湯」の2階を整備しました。僕らの滞在場所を確保しよう。それもできていなかったんですね。ボランティアをしてくれる人が滞在できたり、子どもたちの居場所としても必要だなと思って。

—休業ととっても、次のための準備期間であって、休んではいなかったのですね。

そうなんですよ。ちゃんと休まなきゃという意味でのオフを無理やり取っても、結局、「海浜あみだ湯」が休みだからできることをやっている。

4月になると、子どもたちも来るようになって、5月から本格的に、1ヶ月単位で長期的に関わりたくてくださるボランティアさんたちの受け入れを始めました。徐々に、道路も復旧してきて、奥能登までのアクセスが整ってきたタイミングなんですね。復興イベントの運営なども引き受けていました。7月、8月になると、珠洲市内にも仮設住宅が建設されたり、水道の復旧率も20パーセント近くまで戻って、自宅でお風呂に入れる方が少しずつ増えていく中で、地域のオピニオンリーダーを集めたり、逆に呼ばれたりして、それぞれの状況やそれまで培ってきた知識などを交換しました。お盆は、帰省した方がたくさんいて、一般の方が入れる温浴施設がないので、「海浜あみだ湯」の営業自体が大変でした。

本音で語り合い、本当の課題を見つける

—地域のオピニオンリーダーたちとの情報交換の場においては、どんな声や内容が挙がっていたのでしょうか。

クローズドな場だったので、立場によって言いづらかったりすることも、お互いにフラットに話し合おうと。例えば役場の方は、公の場だどうしても発言しづらいこともありますよね。そういった声を拾ったりするための場でした。学校の先生方も大変で。中学生は二次避難をしながら、先生方が寮母さんのようなことをして、受験勉強を教えていました。なんでそうなってしまったのかというと、一般のボランティアを受け入れることができなかったんです。学校って、特殊な性質なのかもしれないね。結果、先生方に全ての負担がのしかかる。他にも、社会福祉協議会や健康増進センターで地域の高齢者さんのヒアリングをしている方たちも、人手不足の結果、県外から応援に来てくださったボランティアのサポートに回らざるを得なくて、負担になってしまったり。そんな話を、それぞれの立場から課題感を出し合いながら、どんな解決策が必要なのかを話し合いました。

—そうした本音で語れる場は、とても大事ですね。そうしないと、本当の課題は見えてこないですよね。話し合いを通じて、どんなことが見えてきたのですか？

それまで本当に駆け抜けてきた人たちなので、そうした場を設けることで、一度振り返って、その先をみんなでつくっていく機運にできたらいいなと思っていました。大きな話になってしまいますが、珠洲市にも、復興支援センターのような、行政と民間の中間支援組織が必要かもしれないね、とか。能登全体としても、民間でそういう動きが出てきています。本当に若い人がいないというか、人手が明らかに足りないんです。珠洲市は、地区でいうと10の地区があるのですが、行政だけに任せずに、自分たちで地区ごとの復興のあり方を考えていく必要があるし、学校の統廃合に向けた議論もある。この珠洲という豊かな里山、里海があるからこそ残したいものは何か、意見交換をしていく必要もある。

—やることが盛りだくさんですね。能登ももっている資源において、復興を考えるとここぼれ落ちてはいけないと思うものは、なんですか？

一番は、「死なない力」だと思います。自給自足に近い暮らしをしていたり、暮らしに必要なものを自分たちでつくってきた風土や慣習が、この奥能登は強いと感じているんです。もう一つは、自治の意識。いわゆるご近所づき合いですが、他人をケアしあう意識があらためて強い地域だなと。

—「死なない力」は、すごく大切であるにもかかわらず、いつの間にか現代人は忘れてしまっているようにも思います。今後は、どんなことに注力していきたいと考えていますか。

一つは、「海浜あみだ湯」という場所の特性があるからこそこぼれてくるような、公の場では発言しにくい小さな声を、何かしら提言する形にしていきたいなと思います。そういった場所と状況を他でもつくってほしいという相談も受けていて、あらたに拠点づくりに取り組む予定です。それは、家を失ってしまった移住者仲間や珠洲の人たちが、一時的に滞在できたり関わられたりする、依り代としての場所です。

—「海浜あみだ湯」だからこそ、こぼれてくるような小さな声って、素敵ですね。銭湯ならではのと思います。

いろんな立場や状況もありますが、やっぱり一人の人間じゃないですか。裸になって身体を洗って、お湯に浸かって出るとか、やっぱりぼろっと出てくる言葉があったりするんですよね。自然と、珠洲への思いがこぼれてくる。そして、できれば政策の提言までもってきたい。「海浜あみだ湯」は、このまちの行く末と、運命共同体なんです。あみだ湯に限らず、他の業種もそうだと思いますが、まちが衰退して人がいなくなれば、一緒に終わっていくしかないんです。

—ぜひ提言へとつなげてほしいです。能登の震災のあと、現地で頑張り続けている方たちって、本当にすごいと思っているんです。少なくとも、逃げずに立ち向かっている。なぜそこまで、能登に対して頑張ることができるのでしょうか？

少なくとも、儲かるからとか、名が売れるとか、そういう意味合いが全くないことは間違いないですね。単純に、このまちが好きで移住して、能登の文化に魅力を感じていて、ただそれを大切にしたり共有したりしたいという、その気持ちの延長にある。自分の手の届く範囲のことしかできないかもしれないけれど、惹かれたまちの行く末を、ちゃんと見届けたいんです。大切だから、寄り添い続けたい。そんな気持ちが、自分のなかにあるのでしょ



被災した建物の廃材や家財を燃やし、銭湯の熱源にすることで町を甦ら、「kari(sou)」という活動もおこなっている。

<p>海浜あみだ湯 石川県珠洲市野々江町5 Instagram : @amidayu.suzu</p>	
--	--

過疎地域の子どもたちの居場所を、 平時以上に、安心できるものにした

輪島市の中心部にある、子どもの居場所「わじまティーンラボ」。2023年12月に開所しましたが、わずか1週間後に能登半島地震が起きました。避難生活を送る子どもたちに、第三の居場所を提供したいと、被災後に停止していた受け入れを3月下旬から再開した特定非営利活動法人じっくらあと事務局の小浦明生さんに、震災のこと、子どもの居場所の大切さについて聞きました。

聞き手:増村 江利子 / 写真:蒲沼 明

—

小浦明生（こうら・あきお）

特定非営利活動法人じっくらあと事務局

輪島市出身。大学卒業後、アパレル企業で約20年勤務。退社後に輪島市地域おこし協力隊として、任意団体じっくらあとのNPO法人化や中高生サードプレイス事業の「わじまティーンラボ」を運営。同時にアパレルでのマネジメント経験を活かし、ビジネスパートナーとなった企業の人材マネジメントコンサルも受け持つ。



過疎地域における、 子どもたちの居場所のなさ

—「わじまティーンラボ」は、1階にある「ごちゃまるクリニック」という医療施設に併設されているのが特徴的です。

僕の兄が院長で、義理の姉が副院長兼、「わじまティーンラボ」を運営する「特定非営利活動法人じっくらあと」の理事長なんです。クリニックは2022年の12月からスタートしたのですが、子どもの居場所の必要性を感じたことから、活動を始めました。地域に寄り添って、包括的にサポートしていきたいという理念があるんです。僕は、この事業を担うために、Uターンしてきました。

—子どもの居場所づくりには、どのような背景やきっかけがあったのでしょうか。

過疎地域って、単純に子どもたちが過ごせる場所が少ないんです。ファミレスもマクドナルドもないから、集える場所が乏しいし、田舎だからといって、砂浜や森も危険だから行けない感じになっていて、昔ほど遊んだりでき



ない。そうした居場所のなさという課題がベースにありつつ、学校の統廃合もあって、どんどん生きづらくなっていく。

人数も少ないので、人間関係が固定化されるんですね。小学生でちょっとつまずいちゃうと、高校までずっとその関係が続いていくところがある。そういった閉塞感もあって。

—子どもたちにとって、第三の居場所があることは、とても重要ですね。震災後、再開までの道のりは大変だったかと思えます。

お正月は、妻の実家のある三重県に帰省していました。早くここに戻らなきゃとか、戻る以外、選択肢がなかったんで、すぐに準備をしました。ただ、安全面や断水という課題もあるので、断水が解決したら家族を呼び寄せようと思って、まず一人で戻ってきました。結局、家族と合流できたのは、ゴールデンウィークになってしまいましたね。

—戻る以外の選択肢はないという、強い意志を感じました。

3年後、5年後といった先のことまで考えられませんでした。少なくとも家が無事であることが確認できたので、雨風は凌げれると思って。近くにある実家も損傷を受けたものの倒壊は免れたので、何かあれば実家もあるなどという、そんな感じでした。とはいえ、まちは本当にひどい状況でした。実家は、朝市通りにあるんですが、3軒隣まで燃えてしまったり、目の前の家も倒壊して。高校を卒業するまで、ずっとそこで暮らしていたんです。その故郷が火事で全てが燃えてしまった光景は、本当に言葉にならない、表現ができないぐらい感情が渦巻いて。これが喪失感なのでしょうね。もうなくなってしまったんだ、って。知人が亡くなったり、よく遊んだ場所もなくなった。人生で初めてそういう経験をしたので、当時はもう本当に言葉にならなくて。悲しいとか、怒りとか、苦しさとか、いろんな感情が複雑にありました。

—本当につらかったと思います。先ほど、朝市通りに行ったのですが、見渡す限り瓦礫の山といった感じで、どこが通りかもわからないくらいでした。ここに通う子どもたちに、震災を経た変化はあったのでしょうか。

そうですね。1月でしたから、特に高校3年生、中学3年生は進路の選択を迫られるなかで、経済的な問題で思うような選択ができなくなってしまったケースもありました。なるべく輪島に近い距離感で進学先を選び直したり、もしくは進学をあきらめて就職したり。進路の決断に、大きく影響が出ていると感じました。それで、災害時に「緊急子ども支援」を行っている認定特定非営利活動法人カタリパと連携して、1月半ばから、高校の一室を借りて、被災した子どものための居場所「みんなのこども部屋」を開設したんです。「わじまティーンラボ」を利用する子どもたちが、避難所生活になったり、仮設住宅に入居したり、遠方へ一時避難したりといった状況になるなかで、こまめに連絡をとって、子どもたちとつながり続けました。

思いの差も、理解度の差もあるし、 立場も異なる

—「わじまティーンラボ」のような、子どもたちを支える場所や関係性は、平時以上に大切ですね。震災前と震災後で、施設自体はどのような変化がありましたか？

施設的な充実度は徐々に増していますが、常に変わり続けていかなってはいけない側面もありますし、利用者の伸びに対して、最近ようやく運営面が追いつきつつあるかなと思っています。これは震災前になりますが、2023年は1年間、富山大学の芸術文化学部の学生による、建築の観点から子どもの居場所を考えていくプロジェクトが輪島朝市をフィールドに展開されました。子どもたちが何を求めているのかと、どんな遊びをするのか、どんな思考をもっているのかを、いろんなワークショップと一緒に開催して、観察やヒアリングをして考察しました。最近は、ユースセンターを運営する、他の市町村のメンバーとのつながりも増えています。子どもたちが何に困

っているのか、金沢方面へ避難した子たちは、どんな生活を送っているのか。ここに残っている子たちは、どんな苦しさや不便さを抱えているのか、それに対して、どんな支援ができるのかを、みんなで考えていこうな会議の場をもつこともできました。

—ポジティブに考えれば、そうした連携は、なかなか平時には生まれにくいかもしれませんね。少し時間が経過したいま、どんなことに課題感を感じていますか？

ひと括りに「輪島被災地」と考えられがちですが、沿岸部と内陸部では、場所によって被害度も異なるし、もっと言うと、個人個人で異なるんですね。家をなくした、仕事をなくした、家族を亡くした、友人を亡くしたという人もいれば、地震が起きたけど無事だったという人もいて、同じ被災地の中でも、全く景色が違う。つまり、ひと括りでは決して捉えることができないです。いまでも避難所が必要で、物資や炊き出しが必要な人もいれば、復興に向けて前に動いている人もいます。その足並みが、なかなか揃わない。足並みという言い方が正しいかどうかはわかりませんが、何をすれば誰も取り残されることなく進めていくことができるのかは、すごく難しいと感じます。これが正しいと思うことを進めていくと、そのことに対して傷つく人や取り残される人もいます。そうした配慮も必要だし、とはいえ、物事を前に進めなきゃというジレンマがある。対話が必要であることを見て見ぬふりをせずに、お互いの考えを尊重して、その上で進めていく必要があると感じます。日常的に、そうしたデリケートな部分が出始めている気がします。

—具体的には、どのようなシーンでそうした難しさを感じるのでしょうか。

例えば、祭りをやるとなっても、哀悼の意を示すべきときにお祭り騒ぎなんてできるかという人もいれば、こういう時だからこそ、みんなを元気づけるためにやる必要があるという人もいます。そういった意見が、まとまらないんですよ。まとまらないけど、何かしらの選択をする必要が



ある。思いの差も、理解度の差もあるし、立場も異なる。それに加えて感情的な部分もあるでしょうし、そのあたりで難しさを感じます。

—もともとあったかもしれないけど表面化していなかったことが、震災によって強く表出した部分もありそうですね。

そうですね。コロナもそうでしたよね。コロナによって過疎地の課題は10年、15年進んだ、などと言われますが、輪島も今回の震災で15年、20年と進んだのではないかと。それを単純に加算すれば、この5年ほどで30〜40年ぐら進んでいるわけですね。30年をかけて進行していく課題が、ここ5年で一気にきていると考えれば、当然追いつくはずがありません。災害によって、6校の小学校がいま1か所の仮設校舎に集められて、もう小中高一貫といった感じになっている。この臨時の状況が、いつまで続くかわからない。校舎を移す学校も出始めていて、選択肢が減りつつもある。これが高校、中学校の大規模な統合になると、子どもたちが置かれる状況って、もう本当に難しい。こんなふうに、とんちん課題が表出する状況に待たないでほしいから、そう簡単には決めることができない。そうしたもどかしさがあります。

まずは、この場所が安心で 過ごしやすいこと

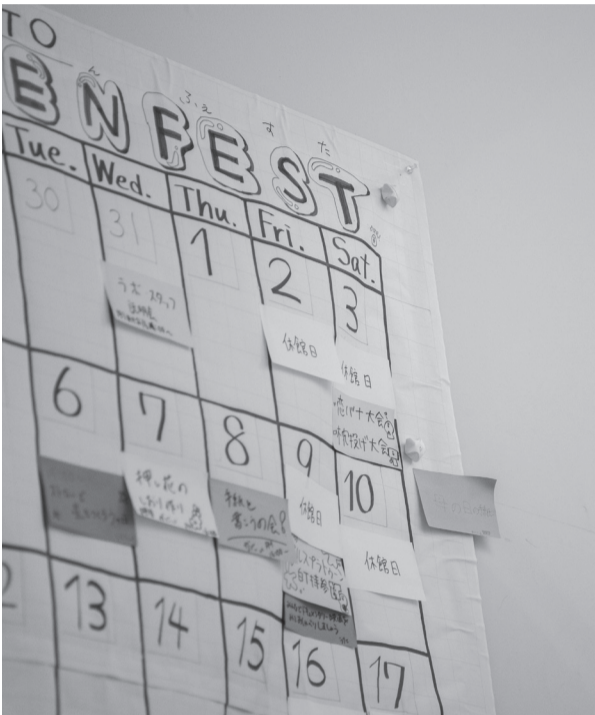
—とても難しいですね。一つのことを簡単には進めることができない状況が、よくわかりました。ちなみに、いま特に取り組みたいことはありますか？

子どもたちにとって、この場所を安心で過ごしやすい施設にすることを、まずは大切にしたいです。子どもたちとの関係性を丁寧に紡ぎたい。そのために、施設のあり方や運営、スタッフとしての立ち振る舞いなどを考え続ける必要があるし、ボランティアとして市外から大学生に

来てもらっているんですが、震災に関係なく、大切に継続したいと思っています。そのためにはどうすればいいの、毎日考えています。

—グリーンズ号外を読んでくださっているみなさんに、お伝えしたいことやお願いしたいことはありますか？

これを機会に、子どもたちを中心とした地域づくりや、体制づくりを重ねながら、この土地がどう変わっていくのか、変わっていけるのかを検証する必要があると思うんです。今後は、そうした部分の支援をお願いしたいです。能登がいかに自立して歩んでいけるかどうかという話かな。そのために何をするのかを、現地に来てもらって、一緒に考えていけたら嬉しいです。



NPO法人じっくらあと
石川県輪島市河井町23部1番地150 2階
jikkurato.com



日本の農山村の未来は、能登をどう復興するかにかかっている

『東北食べる通信』を創刊し、「世なおしは、食なおし」「都市と地方をかきまぜる」の旗を掲げ、20kgのスーツケースを引きずりながら、全国各地を回ってきた高橋博之さん。その後も「ポケットマルシェ」を立ち上げ、どんどん都市と地方をかきまぜる高橋さんに、能登にどう関わり、どんな復興の道筋を描いているかを聞きました。

聞き手:増村 江利子 / 写真:廣川 慶明

—

高橋博之（たかはし・ひろゆき）

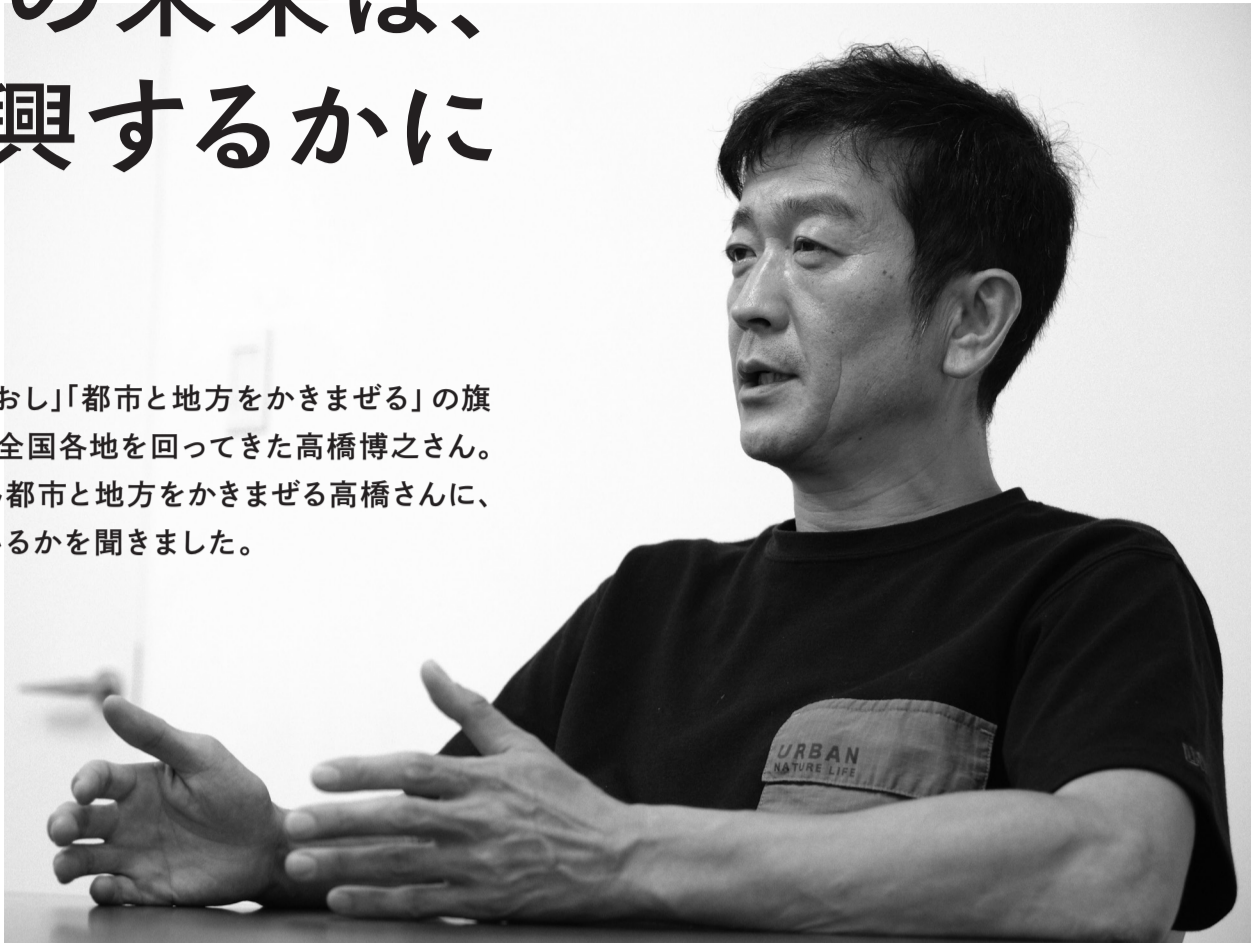
株式会社雨風太陽 代表取締役

1974年、岩手県花巻市生まれ。青山学院大卒。代議士秘書等を経て、2006年岩手県議会議員に初当選。翌年の選挙では2期連続のトップ当選。震災後、復興の最前線に立つため岩手県知事選に出馬するも次点で落選、政界引退。2013年NPO法人東北開墾を立ち上げ、地方の生産者と都市の消費者をつなぐ、世界初の食べもの付き情報誌「東北食べる通信」を創刊し、編集長に就任。2015年、株式会社雨風太陽設立、代表取締役役に就任。

圧倒的な、自然という存在

— 私が能登へ足を運んだのは、震災から4ヶ月が過ぎた頃でした。高橋さんは、すぐに動かれていましたね。

震災のあった元日は、実家のある岩手の花巻にいました。家族で温泉に行って、その帰り道、車の中でニュースを見たんです。「バプロフの犬」ですよ、条件反射。考えなして、とにかく現地へ行ってからいろいろ考えた。自然災害って、みんなで力を合わせて立ち向かうしかないじゃないですか。もう僕らは、都市化した社会の中で、まるで自然がないかのように生きている。いま、アンチエイジング(加齢と戦う)と言うように、いつからか歳を取ることも敵になった。



死も、自然からすごく遠ざかっていると思うんです。都市は、自然を排除する思想でつくってきましたよね。人間が経済社会活動を営んでいく上で、余計なものど捉えられてきた。でも災害って、いまなお自分の真横に、圧倒的な自然がやっぱりあるんだって、ガツンときますね。

— 自然を相手にしたら、法律もルールも何も通用しませんよね。

そう。被災地では、スマホで連絡しながら運転しているも、警察だつてとがめません。平時だったら、すぐに止められて、点数を引かれるけれど、津波が来たつてときに、信号が赤だからって止まってたら、津波に飲み込まれちゃう。人間がつくった都合は、自然には通用しない。だから災害って、忘れていくけど、いまなお圧倒的に存在している自然があることをいやおうにも思い出させます。

— どんなふうに残地に入られたのですか。

能登に知り合いがほぼいなかったし、会社の事業ではないので、僕ひとりで乗り込みました。能美市の農家さ

んから2トントラックと軽トラを借りて、宿泊場所は、金沢で『加賀能登食べる通信』をやっていた仲間に、寝泊りしていいよという家を借りて。金沢から奥能登まで、片道8時間とか9時間かかるんです。東北のかつての仲間に片っ端から声をかけたら、みんなボランティアに来てくれて。1月は、来た玉を全部打ち返していました。『東北食べる通信』をやっていた頃から、災害があるたびに、日本各地の生産者さんの支援をしていたんです。一次産業って、毎日小さな災害に向き合っているみたいなのです。自然は思い通りになりませんからね。気候危機で自然という変数が大きくぶれるから、生産の難易度が上がっていて、これまでの知恵や技術が通じない。それで、多少サイズがコントロールできなくても、味は変わらないことを消費者に伝える。そうした生産者と消費者のつながりをつくっていこうという会社なので、まさに災害時は、生産者と消費者のつながりの力を発揮できる場面があるんです。

— 1月9日から、被災地での炊き出しを支援する「ポケマル炊き出し支援プロジェクト」をされていましたね。炊き出しの回数は42回にも及び、125名の生産者から計3,901キログラムの食材が9,280名に提供されたと聞きました。

全国の生産者が炊き出しで使う食材を提供してくれて、その食材を運ぶ運送費は、消費者のみなさんが寄付してくれました。炊き出し支援というしくみはつくったけれど、現地はもう普通の状態ではないから、そんなスキームをつくったところで、回らない。だから、ちゃんと運用されるように、現地に入ってやらなきゃいけないですよ。あとは女性用の下着とか、足りないものを2トントラックに段ボールで70箱ぐらい載せて持って行ったり。金沢から先は簡単には行けなかったのて、金沢、七尾にストックされている物資をトラックに積んで、奥能登に運んで。そうすると必然的に現地の人と会話をすることになって、芋づる式にいろんな人を紹介してもらって、人間関係をつくったのが1月から3月くらい。商売のために来ていると思われたくないのて、名刺も出さずに、岩手から来ていますって話してね。

— そうした配慮も必要なんですよ。

それである人から、東北はどんなふうに残地・復興したのか教えてほしいと言われて。確かに、一生に一度、あ



るかないかのことが起きて、目の前である日突然慣れ親しんだ家とふるさとが崩れたんだから、途方にくれるほかないじゃないですか。どうしたらいいのかわからない。だったら、同じ日本で似たような経験をした人の話を聞くのは、ところ変われば答えも違うけど、参考にはなるだろうと思って、勉強会を始めたんです。東北の当事者を招いたり、オンラインを含めて10回ほど。振り返ってみると、東北は、震災後の復興における反省や教訓が、山のようにあるんですよ。約10年、34兆円ほどかけて未来漁村として復興したけれど、いま、日本で一番若い人が流出しているのは、復興を遂げた東北なんですよ。その反省を共有すれば、同じことを繰り返さずに済む。まあ、要するにお節介をしていました。

都市と地方をかきまぜる

— 金沢、能登にずっと入りっぱなしだったのですか？

最初は金沢を拠点にしていましたが、奥能登で知り合いが増えてくると、もう遅いから泊まってけと言われてお世話になったりして。いずれにしても、1月から3月くらいまではずっと能登にいて、それ以降も9割ぐらいは能登で、何か用あると東京に出てきたり、能登から出張先に行ったりという感じてした。

— そうだったのですよね。もう、自分の真ん中に能登があったのですね。

ありました。なぜかスイッチが入るんですよ。自分の力を発揮できるところだないつも思います。だから、平和な時は、あまり役に立たないかもしれない(笑)。県庁の人たちが、復興計画をつくらうとするとときに、みんな被災地に氣を遣ってまだ行っていないと言うから、幹部の人たちを土日に車に乗せて、連れて行ったり。それこそ国会議員や霞ヶ関の人たちが来る度にアテンドして、国から県庁に必要なことを働きかけてもらったり、いろいろと。

— 復旧・復興アドバイザーボード会議の委員に就任されていますね。

そう、お節介をしていたら、声をかけてもらって。でもね、東北の時もそうなんです、過疎地って、慢性的な災害状態なんですよ。

— 過疎地は、もともと課題を慢性的にもっている、ということですね。

そう。過疎地って、災害によって課題が顕著に表面化するんです。それで、東日本大震災のときは、関係人口ともいえるボランティアの人たちがたくさん来てくれたけど、せっかく集まった関係人口は底の抜けたバケツから抜けていって、13年が経過したいま、関わりはほとんどなくなっている。だから、今度はバケツの穴をふさいだ状態で迎えないと、高齢化率も跳ね上がるし、さらに、人口減少は震災後にもどうしても加速してしまう。もはや、そこにいる人だけで復旧・復興していくのは当然難しいわけです。能登が復旧・復興する上で必要なスキルやノウハウ、ネットワークや人手が、そこにはないのであれば外から調達するほかないわけで、それを復興プランの最重要課題にしていこうと。他の過疎地にもあるような、慢性的な災害状態の課題解決に迫ることができたら、日本の新しいブランドデザインに近づくことができるのではないかと。

— なるほど。コロナもある意味、時代を進めたところがあるかもしれませんが、災害で農山村がもっている課題が表面化したと。例えば、炊き出しのプロジェクトや、その後「のと復興留学」も始められていますが、そういった一つひとつの実践を通じて、手応えみたいなものはありましたか。

被害が大きくて長期化していることもあって、ある意味で避難生活のQOLが問われる時代なんですよ。アレルギーをもっているお子さんだっているし、固いものを食べられないお年寄りもいる。カップラーメンや加工品でなんとか2週間をやり過ごしていたものの、今はそうはいかない。そうしたときに、炊き出しって、あったかいものが食べられるということもありますけど、傷ついているときって、支援の手を差し伸べてくれる人の心遣いが力になるというか、頑張ろうという力が湧いてくるんですよ。

僕の知り合いなんです、岩手県大槌町の猟師が車で来てくれて、ジビエでカレーをつくって提供すると、被災者同士ですぐ心が通じるというか。それまで、炊き出しでカレーが出たこともあるけど「同じカレーだけれど、違うカレーだ」って。それで、涙を流されるんです。同じ痛みを味わった者同士だけが分かる、絆ですよ。

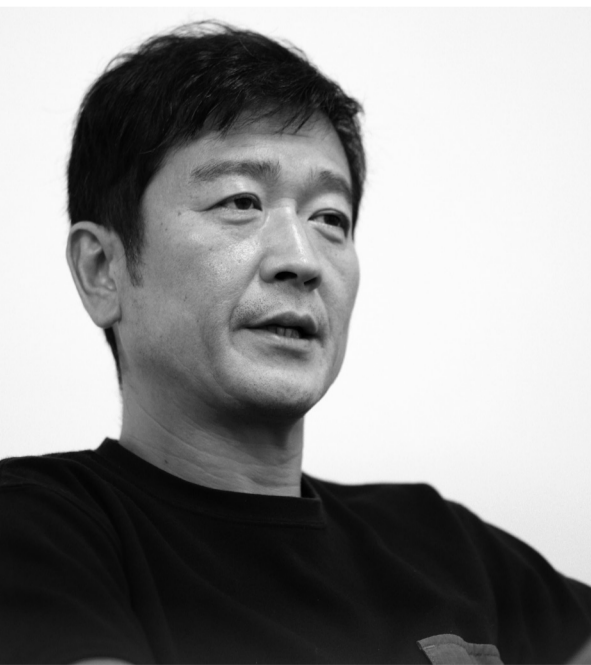
— 炊き出しのカレーを通じて、気持ちを取り交わされる。それは、きっと大きいですよ。

生き抜くリテラシーがあるということ

今回、2週間ほど孤立してしまった集落がありましたが、そこにも行きました。たくまいですよ。2週間も、誰からも手も差し伸べられていないのに、普通に生き抜いているんですから。

— 生きていくためのリテラシーがあるからこそ、できることですね。

燃料は、山から薪を拾ってきて。水は、7年前に上下水道が通ったくらいなので、どこから水を引けるかがわかっている。そうした知恵を、高齢の方たちは、みんなもっているんですよ。なんなら、海底が隆起したことで、サザエがたくさん顔を出していると(笑)。そのサザエをみんなで獲って、パーベキューをしているところに自衛隊がヘリで来て、「食料を持ってきました、大丈夫ですか？」って言うけど、「サザエ焼いてるから、お前たちも座って食ってけ」って(笑)。みんなそれぞれ主体的に、役割分担をして、生き抜いているんですよ。すごいなと思いましたよ。



——それは、本来のというか、本当の意味での自治ですね。

そうなんだよ。消費社会の影響が大きい地域だったら、支援が来るまで、もはや自分たちで何かをすることは難しいでしょうね。吹き出し支援が来たら、みんな列をなして、しばらくすると、おそらく文句の一つも出てる。そのリテラシーの差は大きいなと思いましたね。

——そうですね。例えば離島だと、物理的に本島と離れているから、食料も水もエネルギーも、自分たちでまかなえる状態をつくっておかないといけなかったり、危機意識がありますよね。半島も、本州のなかにあって、地続きではあるけど、地方都市からは距離がある。そうすると、もともとそこにある、文化みたいなものが濃く残っていますよね。そういう文化があった方が、生き延びることができるというか。

そこは、コインの表裏の話かもしれませんね。昔ながらの伝統的な暮らしをしてるからこそ、古き良き日本のいいものは残っているけれど、逆に封建的な社会がまだ色濃くある。それがいやで、若い人たちはまちから出ていくということも考えられる。自治の力って、一流の田舎の条件だと思っているんですよ。人間がつくった世界に住むのが都会じゃないですか。一方で、田舎って神様がつくった世界に人が住まわせてもらっているという世界観も持っている。人は、自然を未だにすることができない。だから鎮守の森があり、八百万の神がいて、五穀豊穡や大漁を祈り、手を合わせてきたわけです。一流の田舎は、その土地固有の自然を生活の力、生業

の糧にして、さらに空間自体を観光資源にして、都市部から人を呼び込むことができる。ところが、戦後の日本は、もう全ての地方は東京の背中を追いかけて、東京はニューヨークの背中を追いかけて、画一的な社会をつくってきた結果、一流の田舎も、三流の都会になってしまった。どの沿線にも同じようなチェーン店が並んで、確かに便利で快適になりましたが、みんな独自性を失って、誇りも失ってしまいましたよね。一流の都会の人が、三流の都会にわざわざ行くかという、行くわけがないですよ。都市部では、いくらお金を積んでも触れることができない価値に触れるために、わざわざ時間とお金をかけて触れに行くわけです。だから、僕は今回、そうした価値を見つめ残すチャンスだと思っています。

——ここから、具体的に、どのような復興の道筋を描くかが鍵ですね。

集落の道路や上下水道を全て修繕していくのか。まちを小規模に集約していくのか。でもみんな、何百年も続いてきた集落の延長線上で生きているので、今いる場所から離れたくないですよ。じゃあ、集約論に負けずに、ここでもう一度暮らしていける条件は何かと思ったら、それはやっぱり自治だと思うんですよ。逆説的に言うと、なぜ地方が衰退してしまったか、その最大の理由も、ここにあるのではないかと考えているんです。

——田舎も、都市部と同じように消費社会になってしまい、それまでずっと自分たちが大切に培ってきた自治の力が弱くなった結果、非常に合理的な集約論に引っ張られてしまうということですね。

過疎対策って、税金を使ってきたんですよ。道路を舗装して、上下水道や電気を通して、今や、インターネットの環境も敷かれています。もう過疎といっても、家電製品のない家はないでしょうし、一家で車が2台あるのは当たり前だし、ものは行き渡っている。そこで被災をしたときに、税金を使ってなぜ復興しなければいけないのかを、本当は能登の人たちが説明できなきゃいけないんです。日本の未来のために、能登を残さなければいけないと。


——能登の人たちが語るべき、言葉が必要であると。

あえて厳しいことを言うなら、そうです。都市のお金で過疎対策してきたということは、都市から投資してもらってきたということ。都市はその投資の回収をしなればならないし、地方は配当しなければならぬ。その都市が回収すべきもの、地方が配当すべきものは何なのか、ということの言語化です。それがおそらく地方創生の本質であり、これができれば地方の商売も成り立ち、都市と地方の連帯によって、地方は持続可能になっていくのではないのでしょうか。

株式会社雨風太陽 岩手県花巻市大通一丁目1-43-2 花巻駅構内 ame-kaze-taiyo.jp	
---	---




8月に能登を訪問しました。「復旧が進んでいない！」というのが率直に感じたことです。かなりの数の損傷した家屋を見ましたが、解体工事が進んでいるとは到底思えませんでした。道路は隆起したままのところも多数ありました。そこにやって来た豪雨災害…。地元の方の言葉が胸に刺さりました。「7ヶ月このままです。3月中には解体が進むと思っていた。笑うしかない。先進国じゃない、日本は。後進国です。政治の責任です」政治家の責任は選んでいる私達自身の責任でもあります。ボランティア出来る方はボランティアを。伝えられる方は伝え、政治家の方は復旧のために大胆な予算確保を。関心を持ち続け、出来ることを皆でやりましょう。

	関根 健次さん ユニテッドビープル 代表取締役
---	-----------------------------------

私は長野県諏訪市で空き家から古材をレスキューし、必要としている人につなぐ活動を行っています。これまで積み重ねてきたスキルが能登のためになるのならば、一般社団法人のと復興ラボが行う「のと古材レスキュープロジェクト」のサポートを続けています。能登の建物の歴史、家主さんの思いを次に繋いでいきたい。古材のレスキューを通じて家主さんの気持ちに寄り添いたい。そんなアツい思いを持ったメンバーがいます。被災した能登の建物という資源が能登の人の手によってレスキューされ、次へとつながっていく。その活動が能登の人たちの希望になる！そう信じています。


	東野 唯史さん ReBuilding Center JAPAN 代表
---	--

被災地を訪れていつも思うのは、足を運んで自分が何を感じて何を思うのか。そしてどんな表現で伝えていけばいいのか。シリアスな現実を伝える役割は新聞やテレビが担っていて、ウェブメディアだからこそ届けられる人間の感情があるんじゃないかと信じている。喜怒哀楽の感情に触れるためには信頼関係が必要だ。だからこそ一度の取材ではまったく足りない。長期的に関係性をつくっていく。全国を旅しながら能登をキーワードにした勝手な応援活動は続けていくので、必ずまた会いましょう。感情を交換し合ひましょう。

	徳谷 祐次郎さん 株式会社 HUUUU 代表取締役
---	-------------------------------------

みなさん頑張る能登で

このたびの能登半島の地震や豪雨で被害を受けた皆さまに、心からお見舞い申し上げます。自然豊かな地域でもある能登が試練を迎える中、この地域を支えるためには「関係人口」の増加がますます重要となるでしょう。多様な人々とのつながり、そして二地域居住を促進する制度がその後押しとなり、被災地の復興と共に、未来へ向かう力を与えられると信じています。互いに支え合い、能登の未来を共に築けるよう、私たちが皆さまと共に歩み、心を寄せつけます。

	石山 アンジュさん 一般社団法人シェアリングエコノミー協会 代表理事
---	--

1月1日の地震により被災された方々に、心よりお見舞いを申し上げます。私たち VUILD は、テクノロジーの力で誰もが手になれる社会の実現を目指し、これまで参加型の建設手法によって数々の建築を実現してきました。現在羽咋市で進行中の住宅プロジェクトでは、延べ100人以上の参加者の手によって住宅の再建が進んでいます。このような共助型の住宅復興の手法によって、元々の暮らしを取り戻したいと考えておられる方々を応援し、力になれたらと考えております。是非本誌の読者の方々も、応援・参加頂けると嬉しいです。

さとうゆめでは、2024年7月に「のとSDGsファンド」から出資を受け、能登半島の復興につながる「事業」を立ち上げる準備を進めています。さとうゆめは、「700人の村がひとつのホテルに」をコンセプトにした分散型ホテル事業、「無人駅をホテルのフロントに」見立てる沿線活性化事業など、地域の「課題」を、ビジネスの「資源」にひっくり返すコンセプトメイキングにこだわってきました。我々の発想力や事業の立上げ運営の経験が、能登半島の復興を少しでも加速する力になればと思っています。


	新谷 健太さん 海浜あみだ湯
---	--------------------------


	小浦 明生さん わじまティエンラボ
---	-----------------------------


	足袋 拔豪さん 珠洲ホースパーク
---	----------------------------

	山本 亮さん 能登復興ラボ
---	-------------------------


	森山 奈美さん 株式会社御破川
---	---------------------------


	嶋田 俊平さん 株式会社さとうゆめ 代表取締役 CEO
---	---------------------------------------

	紀陸 武史さん 株式会社 Huber, 代表取締役 CEO
---	---

	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---


	蒲沼 明 BOCCA デザイナー
---	----------------------------


	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------

号外のための能登取材から帰ってきて、山越しの空を眺めながら、ふと能登で出会った方々を思い出します。星野道夫のエッセイにこんな一文があります。「ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。」遠く離れていても、能登の今に思いを馳せることは、支援につながるいばん身近なアクションなのではないでしょうか。この号外を手にとってくださった方も同じように、能登の方々の今に想いを馳せてもらえたら嬉しいです。

能登の祭りは、圧倒的なエネルギーに満ちている。能登に暮らす人々の愛情、豊かな自然、そして受け継がれた物語と一体になれる瞬間だ。震災を経てもなお、能登の祭りは力強く地域を彩り、人々を再び結びつけてきた。訪れるたび、温かく迎えられ、心を開ける場所がそこにある。それは、能登を愛する人々や、能登を離れた人々にとっても確かな希望に違いない。能登の祭りは、これからも地域の絆とエネルギーを未来へつなぐ大切な時間であり続ける。それを支える人々を応援したいし、多くの人に“能登の魂”を感じてほしい。


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---


	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------


春に仲間たちとともに珠州市「あみだ湯」にボランティアに行きました。そこには引き続きその土地で暮らし、またその暮らしを支える人たちがいました。速くにもその「暮らし」に想いを寄せ続けることが、能登復興のために必要です。そして何かのきっかけがあれば能登に関わってみませんか？どんな関わりでもいいと思います。震災をきっかけに生まれる新しい「つながり」が、能登の予期せぬ未来に育っていきます。その土地を諦めない人がいる限り、僕らにはできることがあります！


阪神淡路大震災を大学生の頃に体験し、東北や熊本地震においても、微力ながら、編集者として発信を続けた僕としては、今回露呈した、東京を中心とした政治の身勝手や、責任の所在を曖昧にする行政のルールに強い怒りを覚えます。曖昧にすべしものがあるとするれば、それは「支援する」と「される」の関係です。本来この二つは不可分で、その間にある不要な感情を良い意味でなくし、非常時、当たり前に互いが支えあう社会のビジョンを発信していくことの必要性を強く感じています。そして僕自身も声をあげ続けたいと思います。

	藤本 智士さん Re:S / 編集者
---	------------------------------


	秋吉 浩気さん VUILD 株式会社 代表取締役
---	------------------------------------

	嶋田 俊平さん 株式会社 さとうゆめ 代表取締役 CEO
---	--


	紀陸 武史さん 株式会社 Huber, 代表取締役 CEO
---	---


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---

	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------


能登の皆さん。度重なる災害。当事者でない者には決して理解できない、様々な御心労があるかと思います。東日本大震災での経験ですが、こういった辛い出来事の後には、未来への新しい「光」も観えるものです。トンネルを抜ける時は必ず来ますので、どうか希望を失わずにいてください。私も微力ながら、応援していきます。


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
--	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---


	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---


	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--


	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---


	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------


	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--

	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---

	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------

	信岡 良亮さん さとのぼ大学 発起人 株式会社アスノオト 代表取締役
---	--

	大原 学さん 一般社団法人マツリズム 代表 マツリテーター
---	---

	植原 正太郎 特定非営利活動法人 グリーンス 共同代表
---	---------------------------------------

能登半島は、日本海側で一番大きな半島です。
私は、半島という地域性に、惹かれています。

離島は、物理的に本島から離れているため、
なくては生きていけない、食やエネルギーに対して、
そして子どもたちが大きくなったら、一度は島外へ出てしまうことに対して、
危機意識をもっているように思います。

半島は、本島と地続きだけれど、
例えば奥能登は金沢から車で2時間ほどかかるように、
地方都市からの距離は、近くはありません。

そのためか、古くから大事にしてきた慣習や文化、
暮らし、生業、そういったものが、
いまなお、色濃く残っているような気がするのです。

私たちが、本当は失いたくなかったもの。
私たちが、守り、育て、これから生きる人たちに、継いでいくべきもの。

それが、復興という大きな道づくりのなかで
こぼれ落ちてしまうことのないように、
私たちは、能登を、あきらめてはいけないと思うのです。

どうか、みなさん一人ひとりが、
いま自分にできることを考え、行動することで
あらたな希望が生まれ、
その希望が、能登を、満たしてくれますように。

2024年10月24日
greenz.jp 編集長
増村 江利子

＼誰かの思いを届けるために、サポートをお願いします！／

この『グリーンズ号外』は、
非営利メディア「greenz.jp」の運営を支えてくれる
「greenz people」からのギフト(寄付)で制作しています

「greenz.jp」は、NPO法人グリーンズが運営する、「生きる、を耕す。」を実践するWEBマガジンです。2006年7月の創刊から、寄付会員「greenz people」のみなさんに支えていただきながら、7,000本以上の記事を制作し、無料で公開してきました。一人ひとりの暮らしを通じた行動が社会を変えていくことを目指して、新しい時代に必要な価値観やメソッドをお届けするために。月額1,000円から、ぜひ「greenz people」になって、誰かの思いを、私たちと一緒に届けませんか？

『グリーンズ号外』の発行に際して、[greenz.jp編集長の想いをまとめたインタビュー記事](#)を公開しました。ぜひご覧ください！
また、この『グリーンズ号外』を配布できるよ、という方は、インタビュー記事にある申し込みフォームよりご連絡をお願いします。
※『グリーンズ号外』は無料ですが、着払いにて送料のみご負担をお願いします。なお、発行部数には限りがございますので、あらかじめご了承ください。



詳細はこちら



記事はこちら



発行:特定非営利活動法人グリーンズ

企画・ディレクション・編集・執筆
増村 江利子 (greenz.jp 編集長)

デザイン
蒲沼 明 (BOCCA)

撮影
蒲沼 明 (BOCCA) / 廣川 慶明

制作進行管理
三上 佑季 (greenz.jp 編集デスク)

制作サポート
小倉 奈緒子 (greenz.jp 事務局長)
廣畑 七絵 (greenz.jp 編集デスク)
山崎 久美子 (greenz.jp 編集アシスタント)
葛原 亜希/大塚 理香子/高橋 華奈
(greenz.jp 編集インターン)

発行日:2024年11月30日